

アンバチュウを福岡国際マラソンへ!

父親が、エチオピアの前政権の要人であったため、大学への入学を許されず、翌に二度に渡り捕らえられたアンバチュウは、脱獄してカクマ難民キャンプに逃げてきました。彼の夢は、マラソンランナーとして国際大会に参加することです。今年の12月5日開催される福岡国際マラソンに彼を招かれないと断言しています。彼のベスト記録は、昨年だった2時間24分02秒です。関心をお寄せください。ご支援ください。



アンバチュウと支援者さん

カクマのマラソンランナー、アンバチュウ 高藤俊文

頭の上によくこんと髪を結ぶ独特のヘアスタイル、黒髪照れている様なやさしい笑顔。「とってもしみやすうな人だ。」私がエチオピアのマラソンランナー、アンバチュウに初めて出会ったときの第一印象です。

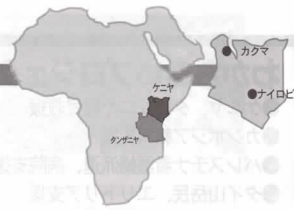
カクマ難民キャンプでの生活が、一週間ほど過ぎたころ、アメリカから来ていた医師に彼のことを紹介されました。1993年、アンバチュウはエチオピアで起こった紛争から逃れ、カクマへ来ました。そして1996年まで彼はカクマで過ごしました。「家族もなく、希望もなかった」と彼は振り返ります。そんな人生を自ら変えようと、彼はナイロビに出てマラソンランナーとしての道を選びました。ランナーとして有名になりたという夢を実現させるためです。

現在、アンバチュウはケニアのチームに加わりトレーニングに励んでいます。私たちがカクマを訪れた昨夏、アンバチュウは、難民登録のためそこに戻ってきていました。カクマキャンプ中、私は彼と走る機会を多く得ることができました。あるときは丘をかけたのり、あるときは水の流れていない川の中、足をとられながら、何度も繰り返してダッシュしたりしました。難民キャンプのはずれにあるカカムト山を大きく一回りしてきましたこともありました。大学で陸上部に所属している私から、彼には全くついて行くことができませんでした。あの暑さと乾いた大地の中を、ほろほろのシューズを履いて走る彼の後姿を忘れることはできません。「途中で突進してはいけない。」「疲れてはいけない。」「自分との戦いだ。」「彼と走って、多くのことを考えさせられ、そして学ばされました。

私たちがナイロビへ戻る前、アンバチュウもナイロビへ戻ったため、再会する事ができました。私は彼のチームメイトたちを紹介され、国立スタジアムの中を彼と歩きました。そしてそこで彼が、立派な陸上選手になってほしいと強く思いました。今でも練り手紙のやり取りの中で彼はこう言います。

"Never say tired. Our eyes must be on our aim, and we must accept reality."

松木さんの支援のもと、彼の福岡マラソン参加の話が前向きに進んでいることをうれしく思います。彼のこれからの活躍を期待しています。



図書館が完成しました

カクマ難民キャンプは、ケニア共和国の北西部、トゥルカナ地方にある。ケニアの首都ナイロビからおおよそ1,000km(小型飛行機セスナで約2時間)、スーダンの国境までは100kmもない。

1992年8月、政府軍のスーダン人民解放戦線(反政府勢力)に対する大規模な攻撃から逃れて、トゥルカナ地方に流入してきたおよそ2万人のスーダンのために、カクマ難民キャンプは、設置された。1998年8月で、難民の総人口は約61,000人であり、今年には、7万人に達するという。現在のキャンプ人口は、スーダン人約42,000人、ソマリア人約17,100人、エチオピア人約2,800人、ザイール人(現コンゴ共和国)約140人、ウガンダ人約400人、ルワンダ人約300人、ブルンジ人約150人、リベリア人8人、セシエル人1人、他。

わがわがプロジェクトは、1993年、94年には、コンテナはいの古着と乾パンを送るとともに、学生2人を派遣した。95年には、古着とサッカーボール300個を送り、幼稚園建設という最初のワークキャンプを実施しました。96年には、外来病棟、97年には、ドン・ボスコの職業訓練棟を建設し、そして98年には、政治的、軍事的、宗教的迫害のために教育の機会を奪われた難民を少しでも支えられるために図書館の建設を行いました。



ワークキャンプに参加した青年たち

”はなれていても、いつもいっしょだ”



梁さんとアディダス

梁東輝

1999年1月28日(木)

貯水池の水位は少しずつだが、確実に上昇していた。浄化施設の工事は数日前に終わっており、既に水門は閉められている。昨日の状況を見ると、夜のうちに水は一杯になっていると予想され、ほぼこの施設に余分な水が越流し、適切に排水されれば、ほぼこの施設自体は完成と見なすよいだろう。私は今朝、早いうちから出発の準備に追われていた。ビザの期限はあと1週間しかのこされていないのだ。ここキボンド・ムテンデリはタンザニアの内陸部でもブルンジの国境近くの西端にあり、交通の便も悪いため、今日中にはなんとしても、首都ダラエスサラムへ向けて出発しなければならぬ。部屋の掃除を(荷物をもとめ、スタッフへの挨拶周りをすませると、ムワジラの飛行場へ向かうために、迎えに来ていたランドローバーへ乗り込んだ。そして、はやる気持ちをおさながら、ドライバーに一言「飛行場へ向かう前にニャビオカ(「乾のような川」という意味の川の川の名前。この川は本当に蛇行して流れている)へ行ってくれ。」と告げると、ドライバーは腕時計をチラリと見て、時間を気にしつつも、いやな顔ひとつせずニャビオカへ向かってくれた。

ニャビオカにあるこの浄化施設は、1996年頃から稼働していた取水施設を改良して、浄化機能を持たせたものである。1996年の段階では、ムチンデリキャンプで必要とされる水のすべてをこの取水施設でまかなっていたのだが、この川の水は見えるからに濁っており、飲み水としては、水質的に適当ではなかった。その後UNHCRの指導により、現地でキャンプの運営や水の管理などとしているTCRS(Tanganyika Christian Refugee Service, LWFのタンザニアでの働き)がいくつかの井戸(ほり)、現在はその水を生活用水として日常的に難民は利用している。さらに、TCRSは、急激な難民の増加による非常事態の水不足に備え、1998年から浄化施設への改良の工事を始めた。

私は、わがわがプロジェクトから、TCRSに1998年8月に派遣され、古着配布をするかたから、この工事に11月から合流していた。わがわがから送られた古着は、確実に難民キャンプへ運ばれ、一斉配布にも立ち会うことができた。あと、私に残された仕事はこの浄化施設建設だけであった。

現場ではこれまで一緒に働いたスタッフのアディダスや日雇い労働者の難民たちが、いつものように集まって

”私は車窓からタンザニアの慣れた景色を見ながらまた泣いた。”



完成後の水門
水はきれいに過濾している

いた。彼らに軽く「マケイ! (ブルンジ国内の公用語キルンディで「おはよう」の意味)」と挨拶した後、早速貯水池を見に行った。水は流れていた。それも、ぼぼ予想したとおりで。ちょうど越流部から溢れ出ている大量の水は、きれいにコンクリート面に溢れて、本川へとつながる水路へ流れ落ちていた。貯水池の周りは、何度補修しても止まらない水漏れがあいかわらず見られるものの、浄水施設へはパイプを通して、確かに水も通っている。一緒にチェックしたアディダスは「あと数日たれば浄化施設の水も一杯になるから、この水も飲めるようになるよ。」と私に話した。

現場写真となりながら、これらをすべて確認するうちに、私の目からひとりでに涙があふれてきた。どうしてだろう? 特に、悲しいわけでも、うれしいわけでもないのだが、涙がこぼれ落ちるてくるのだ。彼らと議論やケンカしたこと、ボンゴ小屋の中で雨宿りをしたこと、川の近くでとれたマンゴを一箱に食べたこと、作っては壊し、試行錯誤しながら、仕事を進めたこと、いろいろなことが思い出されてきた。そして、最後に現場のスタッフや労働者たちにもう一度あいさつをするのと、もう涙はとまらず、しゃべることすら出来なくなりました。そしてアディダスから「俺たちは、またいつかどこかで必ずあえる。はなれていても、いつもいっしょだ」と声をかけてもらうと、私はそれに答えず、ハンカチで顔を隠すようにして車に乗り込んだ。ドライバーは黙って車を走らせた。私は車窓からタンザニアの見慣れた景色を見ながらまた泣いた。(東大大学院、土木技術者)

古着を待つ人々

